

聖書：ルカ 22：31～38

説教題：罪人たちの中に

日時：2013年1月6日

最後の晩餐の席上におけるイエス様と弟子たちのやり取りを見ています。イエス様はこの晩餐を特別な思いで準備され、聖餐式を制定されました。その直後に彼らは「この中で誰が一番偉いか」という議論を始めてしまいました。よりによってイエス様の十字架前夜に、そんな姿をさらけ出してしまった。しかしイエス様と弟子たちとの食い違いが、今日の箇所でもさらに浮き彫りにされます。

まず31節：「シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。」すでにユダに入ったサタンは、さらにペテロに襲いかかろうとします。また12弟子みなに襲いかかろうとしています。私たちはヨブ記1章を思い起こすでしょう。あの時もサタンは神からの許可を得て初めて、様々な誘惑の手を伸ばしました。このことは、すべての上には神の主権があるから安心だ、ということにはなりません。それはヨブがどんなに厳しい中を通らせられたかを思い起こせば分かります。サタンはここでも弟子たちをふるいにかければ、彼らはすぐに落ちこるに違いないと踏んでいたのでしょうか。今までは生温い環境にあったから、何とかイエスに従って来たが、ちょっとでも厳しい環境に置けば、すぐに動揺して信仰から離れ去るに違いない。それを証明するための決定的な戦いを挑んで来たのです。

イエス様は32節で言われました。「しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」イエス様はペテロのために祈ってくださっていました。そのおかげでペテロは守られるということが言われています。しかしペテロにとっては受け入れられない言葉が混じっていました。それは「立ち直ったら」という言葉です。これはどういうことか。私が一回は倒れるということか。ペテロは憤慨します。33節：「シモンはイエスに言った。『主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。』」私はそんな情けない人間ではない。イエス様と一緒にどこまでついて行くつもりのある人間である。ペテロとしてはウソ偽りを述べているつもりはなかったでしょう。しかし実際、彼はこの後イエス様を裏切ります。死であろうと覚悟はできていると言いながら、簡単にイエス様から逃げ去って行きます。

ここから思わされることは、私たちも実は自分を良く分かっていないということです。特に自分がどんなに弱い存在か、どんなに罪深い人間かをほとんど分かっていない。私たちは聖書を通して、自分は立派な人間ではない、本当に罪深い人間である、とは知っているつもりでしょう。しかし実際の私たちは、私たちが今そう思っている以上にもっと罪深いのではないかと考える必要があるのではないのでしょうか。

ペテロはそのことを認めません。そんな彼にイエス様は34節で言われます。「ペテロ。あな

たに言いますが、きょう鶏が鳴くまでに、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」 益々受け入れられない言葉です。他の福音書を見ると、ペテロはこのイエス様の言葉も否定したようです。「私はあなたを知らないなどとは決して申しません。」と力を込めて言い張ったと。他の弟子たちもそう言った、とあります。しかしそれは空虚な自己主張に過ぎないことが時間と共に明らかになります。その弱さを思って、あらかじめ警告したのに、彼らは耳を貸さず、自分にはできると豪語し、間もなく倒れてしまう。

続く 35 節以降の記事も同じです。イエス様はこれから弟子たちに臨もうとしている危機的状況について警告しようとしています。それに先立ってまず、これまでの経験を思い起こさせています。「わたしがあなたがたを、財布も旅行袋もくつも持たせずに旅に出したとき、何か足りない物がありましたか。」 9 章と 10 章で見ましたが、弟子たちは宣教旅行に遣わされる時、何も持って行かないようにと言われました。杖も、袋も、パンも、金も。下着も 2 枚は足りない、と。これは神の摂理の御手に信頼する訓練でしたが、その前提としてユダヤ人の間では旅人へのもてなしが美德として実践されていたこと、特に神のために働く預言者たちに対してはそうだったことがあります。しかしその時の状況と今は違うのだ、とイエス様は仰っている。36 節でイエス様は「しかし、今は、財布のある者は財布を持ち、同じく袋を持ち、剣のない者は着物を売って剣を買いなさい。」と言います。その理由が 37 節にあります。「あなたがたに言いますが、『彼は罪人たちの中に数えられた』と書いてあるこのことが、わたしに必ず実現するのです。わたしにかかわることは実現します。」 一言で言えば、イエス様にいよいよ旧約で預言されていた苦難が臨むから、ということです。それはとりもなおさずイエス様と共にいる弟子たちの生活も困難になることを意味します。

それにしても、「財布を持ち、袋を持ち」までは良いとしても、剣を持って、とはどういうことでしょうか。イエス様が文字通りの剣を意味したのでないことは、この後を見るとはっきりします。49～51 節で一人の弟子が大祭司のしもべに撃ってかかり、その右の耳を切り落とします。イエス様はその時、「でかしたぞ！」とは言わず、「やめなさい。」と言われました。そして敵のしもべの耳にさわり、直してやられました。また使徒の働きにおいてクリスチャンたちは多くの迫害を繰り返し受けますが、そこでも剣の暴力で応答したことはありません。では 36 節のイエス様の言葉はどういう意味なのでしょう。これは先に述べたような厳しい試練が臨むことを真剣に受け止めて、ふさわしい準備をせよ、ということです。財布、袋、剣がそれぞれ何を指すかということは大事な問題ではなく、それらに象徴される緊迫した時代に突入するから、覚悟をもってこれからの状況に臨まなければならないということです。具体的にそれはどうすることなのか、ここでははっきり述べられてはいませんが、同じ状況に臨まんとしているイエス様の姿を見る時、示唆されていることがあります。その一つは祈りです。イエス様は 32 節で「祈りました」と言っておられましたし、この後のゲッセマネでも祈りに打ち込まれ、弟子たちにも「誘惑に陥らないように祈っていなさい」と言われます。またイエス様は 37 節で旧約聖書を引用し、それを思い巡らし、そこに立っておられたように、御言葉に立つこともそうでしょう。いずれにしろ、必要な備えとは実際の剣を用意することではなく、霊的な備えをしっかりとすることだったのです。

ところが弟子たちは 38 節で「主よ。このとおり、ここに剣が二振りあります。」と言います。イエス様はそれに対して「それで十分」と答えられます。「それで十分」という言葉は、肯定する場合にも使いますが、否定的な意味で使う場合もあります。申命記 3 章 26 節：「もう十分だ。このことについては、もう二度とわたしに言ってはならない。」 I 列王記 19 章 4 節：「主よ、もう十分です。私のいのちを取ってください。」

ここでのイエス様の言葉も、同じニュアンスと考えられます。つまりイエス様は、もうその話は終わり、と言われたのです。時が刻々と迫っている中で、ここまで無理解な弟子たちを前にして、「もういい」と言われたのです。最後の大切な夜に、誰が一番偉いかと論じたり、警告を無視して私は大丈夫と言い張ったり、霊的な準備を命じたのに「ここに剣が二本ありますから大丈夫でしょうか。」などと言っている。本当に情けない弟子たちの姿です。3 年間一緒に歩いて来て、最後の夜にイエス様に励ましを与えるどころか、落胆しか与えられなかった彼ら。これは私たちの姿そのものでもあるでしょう。

しかしここにあるグッドニュースは、こんな彼らが捨てられないことです。イエス様は前回、「仕える者となりなさい」と言われましたが、ここでも彼らのために一方的に仕えてくださっています。その一つは 32 節のとりなしの祈りです。弟子たちの知らない間に、イエス様は祈ってくださっていました。イエス様はこれまでもしばしば大切なことを祈るために一人で山に退いたり、一晩中祈りながら夜を明かされたことがありました。この弟子たちについても、彼らが今後どのような信仰を持ち続けられるのかは、今後のキリスト教会の運命を握っている事柄とさえ言えます。イエス様はそのために心を注いで祈ってくださいました。そのことに感謝せず、むしろ反発する彼らのために、執り成しの祈りをしてくださっていたのです。

そしてその祈りが聞かれる根拠は、37 節に示されているイエス様の身代わりの受難です。「罪人たちの中に数えられた」とあるのは、その人は罪人ではなかったということです。イエス様はこの時、イザヤ書 53 章の御言葉を心に留め、これが必ず実現すると言われました。イエス様は聖なるきよい神の子であるのに、罪人と共に立ち、罪人に数えられることを良しとされました。それは罪人にふさわしいあらゆるさばきをその身に受け、苦しみ、呪いの死を死ぬことを意味します。聖なる神の御子がそのようにして払った代償は無数の人を救うことができます。この犠牲に基づいてこそ、イエス様のとりなしは力を持つのです。イザヤ書 53 章 12 節には、ここで引用された言葉がありますが、それに続いて次の言葉で 53 章が締めくくられています。「彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。」まさにそのことをイエス様はして下さっていたのです。イエス様が私たちの身代わりに罪人に数えられ、死んでくださったからこそ、そのお方のとりなしはとてつもない力を持つのです。

2013 年、私たちはどのように歩もうとしているのでしょうか。今日の御言葉から思わされることは、私たちがこうして恵みの中を歩めるのは、イエス様の十字架とそれに基づく執り成しの祈りが今日もささげられているからということです。イエス様の恵みがなければ、どうしよ

うもない私たち。弟子たちと同じように、たくさんの恵みにあずかりながら、イエス様をがっかりさせるような振る舞いばかりさらけ出しているような私たち。しかしそんな私たちが今朝、こうして生かされ、守られているのは、弟子たちと同じように、ただ一重に主の一方的な恵みとあわれみによることです。主が私の位置に取って代わって罪人に数えられ、十字架上で大きな犠牲を払ってくださったから。そしてそのみわざに基づいて今日もとりなして下さっているから、私の歩みが今このようにある。私たちはそのことに感謝し、一層主の十字架と、祈ってくださる主に目を上げて、感謝の歩みをささげたいと思います。

そして感謝を現わす歩みの一つは、32 節にあるように、兄弟たちすなわち私たちの周りの方々を力づけることです。どのようにしてそれができるのでしょうか。それは上から「頑張れ！」と声をかけることによってではありません。自分の偉さの中に立って、「もっとしっかりやれ！」と発破をかけたり、プレッシャーをかけることによってではありません。そうではなく、自分もただ主の恵みによって立たせていただいていることを知っている謙遜な人としてです。こんなどうしようもない私をも立ち直らせ、立ち上がらせて下さっている主イエス様にこそ、すべての人にとっての唯一の希望があることを指し示すことによってです。

イエス様は私たちのために尊いご自身をささげてくださいました。そして今日も祈っていただきます。私たちの歩みが最後の救いに必ず達することができるように、ご自身の十字架のみわざに基づいて力強くとりなし続けていてくださいます。このイエス様を見上げるところから、この一年も、イエス様に対する感謝の歩みと周りの方々を力づけ、励ます歩みを導かれたいと思います。

「しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わることはない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。」(ヘブル 7 章 24～25 節)